



## 体験談シリーズ

親子編

おせつかいと言われても  
伝えたい思いがある

徳永ミチ子さん（64歳）

どうすれば娘の気持ちを  
変えられるだろう

10代の頃から長年、靈友会の教えを実践して  
きたつもりでしたけど、一番大事なことに  
気づかせてくれたのは、それまで靈友会には  
批判的のことばかり言っていた娘なんです。

そう話すのは、徳永ミチ子さん（64歳）。  
徳永さんが話を続ける。

徳永ミチ子さんの娘・ミキさんは、親が入会した靈友会をなんとなく続けていた。  
しかしある日、同じ職場で働く仲間の姿を見ていたら、  
ほうっておけないという気持ちになった。

# おせっかいと言われても 伝えたい思いがある

体験談シリーズ  
親子 編



会えば、その場がつどい。仕事の悩み、子育ての相談、  
話は尽きない

娘は私が言えば弥勒山セミナーや他の行事にも行つてくれるのですが、それは私への義理立てみたいなところがあつて、本当にただ参加するだけでした。自分からやつてみようという気持ちがなくて、私はどうすればそんな娘の気持ちを変えられるだろうと思つていました。

## 私にも何かできることがあるのかもしれない

ところが、一昨年の12月のことだった。娘・ミキさん(30歳・仮名)が福岡で行われる靈友会の行事に知り合いを連れて行きたいと言い出したのだ。いつたいミキさんの心境にどんな変化があったのか。本人に話を伺つた。

私は別に靈友会のことが嫌いなわけではなくて、ただ自分がやる理由が分からなかつたんです。でも、同じ職場で働くIさんは(46歳)見ていたら、ほうつておけませんでした。何かしてあげなくちゃいけないと思つて、気がついたら夢中で靈友会の話をしていたんです。

ミキさんとIさんは同じ病院で働いていた。ミキさんは医療事務の仕事をしていて、Iさんは看護師だった。当時、Iさんは職場の人間関係が原因で半年間、休職をしていて、ミキさんから声をかけられたのは復帰して間もない頃だった。Iさんが当時を振り返る。

同じ看護師の先輩と、どうしてもうまく

やれずに悩んでいました。その人は感情の起伏が激しく、私はいつもターゲットにされていました。仕事に行くのがつらくなり、無理をして仕事を続けていたら体調を崩してしまいました。誰にも会いたくなくなつて、家で引きこもりがちになつてしまつたんです。

それでも病院に通つて、薬を飲むようになると少しづつ体調も回復していきました。やつとの思いで職場に復帰した頃、ミキさんから靈友会の話を聞いたんです。

## 会員のことを 心のどこかで責めていた

Iさんには亡くなつた祖母の供養がないという思いがあり、靈友会が先祖供

おせっかいと言われても

伝えたい思いがある

養の教えだと知つて入会を決めた。だが、一方で宗教は怖いものだという思いもあつた。Iさんが話を続ける。

以前、私は他の宗教に入つていて、そこでずいぶん嫌な思いもしたんです。だから警戒心もあつたんですが、私が思つていた宗教とは違いました。みんなが優しくて、私の話を真剣に聞いてくれるんです。病気になつてからはいつも孤独で、誰にも自分の話なんかできなかつたけど、心の中を打ち明けられて少しづつ元気になることができたんです。

そんなIさんの話を聞いて、ミキさんも自分の思いを話す。

以前、私は他の宗教に入つていて、そこでずいぶん嫌な思いもしたんです。だから警戒心もあつたんですが、私が思つていた宗教とは違いました。みんなが優しくて、私の話を真剣に聞いてくれるんです。病気になつてからはいつも孤独で、誰にも自分の話なんかできなかつたけど、心の中を打ち明けられて少しづつ元気になることができたんです。

Iさんが元気になつていく姿を見て、靈友会の教えを実践するのに理由なんていらないんだと思うようになりました。Iさんの場合は、亡くなつたおばあちゃんの供養がしたいからと入会したわけだけど、どこでこの教えのことを待つている人がいるか分からぬし、まずは声をかけてみることが大事なんだなつて気づきました。

そんなミキさんの変化が、徳永さん自身を変えていくことになる。

私は娘よりもたくさんの人を導いているし、自分なりにお世話をもってきたつもりでした。でも、会員の中には反発してくる人も多くて、そんな人たちのことを心のどこかで責めていたんです。本気であなたのこ

## 悲しみに沈む義姉の 心に寄り添う



「一人でも多くの人に笑顔を届けたい」と徳永さん

そう気づいた徳永さんは、一度、靈友会をやめてしまつた義姉の家を訪ねることにした。その人は3年前に息子さんが自殺をしてしまい、悲しみに沈んでいたが、徳永さんは何とか力になりたいと思つた。

とを思つて心配しているのに、どうして分かつてくれないと。

だけど、娘を見ていたら自分は一番大事なことを置き去りにしてきたのではと気づきました。それは、純粹に相手を思つて寄り添う心。簡単なことのように思えるけど、なかなかそれができないのが人間で、私もそうだったし、そんな自分を変えたいと思つたんです。

靈友会をやめてしまつたときは、突き放す気持ちしかない冷たい自分でした。でも、娘がほうつておけないという気持ちからIさんを導いたように、義姉に対しても何かできることがあるんじやないかと思つたんです。ふれてもらいたくないこともしれないし、おせっかいと思われるかもしれないけど、ただ、見過ごすという

ことはしたくなかったんです。

義姉は佐賀県に住んでいて、徳永さんの自宅からは車で1時間以上かかるが、毎月娘さんと一人で家を訪ねて、つどいを開いている。最近は少しづつ元気を取り戻し、2人が訪ねて来るのを心待ちにしているという。

玄関を開け、温かく迎えてくれる義姉の笑顔を見ると、来て良かったと思います。そんな笑顔は私にはかけがえのないものなんですね。

徳永さんは、そう嬉しそうに話す。

『あした21』2020年1月号から